

114  
A426



私懸維持、為資本特借之願

愛應義塾社頭

福澤諭吉

當塾、安政戊午、年初に開業、愛應義塾、改稱  
ニテ、既ニ、十年ヲ過キ、前後二十年間、生徒ヲ教育  
スル、三十餘名、今日現ニ教ヲ受ル者、二百名、向ニ在リ  
明治三年、出格ノ譯ヲ以テ、當地所特借、其後明治  
六年、低價ヲ以テ、地所御拂下、相成ル等、聊カ官  
ノ保護ヲバ、得タレ、且、塾ニ屬スル資本、ハ、一錢モナ  
ク、唯私共、微力ヲ以、些少ノ私財ヲ出シ、社友一同、戮

大正十一年四月  
隈侯爵邸寄贈

力勉強シテ追々建物等モ出来教員ノ給料モ  
固ヨリ豊ナラス毎月生徒ヨリ若干ノ月謝金ヲ  
集メ其月限りニ配分シテ僅ニ衣食資ニ供スル  
ノニ教員ノ給料尚且足ラズ况シテ教場ノ書  
籍器械等ハ速モ完全ヲ望ム可ラス尚下テ整  
舎ノ營繕非常ノ手當等ニ至テハ何ノ月途モ  
アラスホニブ一具ダニ用意ナキ次第其他推シテ  
知ル可シ

然ルニ近日ニ至テハ舊藩士族モ日ニ困窮ニ迫リ  
僅少ノ學費ニモ差支テ或ハ天稟ノ才ヲ抱キテ

ガヲ初ヨリ就學ノ念ヲ絶ツモノアリ或ハ就學ノ  
ニシテ廢學スル者アリ或ハ僅ニ卒業シテ直ニ糊  
口ノ路ヲ求メ遂ニ大成ノ機ヲ認ル者アリ國ノ為ニ  
謀テ遺憾コレニ過キズ抑モ方今ノ日本ニ於テ不  
平ヲ唱ヘテ世ヲ害スル者モ學者士族ナリ平和ヲ  
獎勵シテ國ヲ安ラ助ケ富強ノ大勢ニ益スル者モ亦  
學者士族ナリ其平ト不平ト二途ニ分ル原因ハ固  
ヨリ多端ナリト雖モ知見ノ廣狭深淺ハ其因タル  
ノ最モ大ナルモノナレバ假令ヒ一私塾ノ中ニテモ學  
者ハ安ニシテ其業ニ就キ就業ノ年限ヲ終テ大

成ノ期ニ至ラシメ其知ヲ深クシ其見ヲ博クシ以テ  
國益萬分ノ一ヲ致サシメニ一最モ願フ所ナリ  
右ノ如ク貧ニシテ才カアル者ヲ教育セシメテ之ニ  
衣食ヲ與ヘテ又隨テ之ヲ教ルガ如キハ私塾ノ性  
質ト今日習慣トニ於テ敢テ望ム可キ所ニ非ザレ  
之ヲ教ルニ本人ノ力ニ堪ハサル程ノ學費ヲ要スル爲  
ニ就學ノ念ヲ絶タレハルハ歎ケカハレキ次才ニ所座  
候當塾ニ於テモ今日マデハ無理ニ生徒ノ金ヲ收  
歛シ無理ニ教員ノ給料ヲ薄クシ尙不足ニシテ  
止ラザル得ザルノ場合ニ至レバ社頭其外ノ者ヨリ或ハ

千或八百ノ私金ヲ投シテ幸フシテ維持シタルナレ  
比前条ノ如ク生徒タル可キ者ハ日ニ疲弊ニシテ  
會計ハ更ニ目途ヲ得ズ此ハ政府ノ保護ヲ乞  
フノ外方畧無之ニ付キ敢テ請願ノ次第ヲ右陳

述仕候

此度慶應義塾維持ノ資本金トシテ無利足  
金貳拾五萬圓當明治七年十月ヨリ向拾年ノ間  
并倍被仰付度抵當ニハ福澤諭吉ノ名前ニテ  
實價貳拾五萬圓ニ直ル公債證書ヲ納メ可申  
然ルハ本高貳拾五萬ノ利子毎年若干ヲ得テ

書籍器械營繕等ノ費用モ押々ニ目途ヲ立テ  
尚學則ヲモ改良シテ三石ノ生徒安レシテ業々  
就キ私共ノ素志ヲ達スルノミナラズ天下公共ノ為  
幸甚コレニ過キカル次第ニ御座候何卒持典  
ヲ以テ御聞届相成候様仕度尚出願ニ付委  
細ノ趣旨ハ別紙ニ記シ候間是亦本書ニ併セテ  
御披見奉願候也

明治七年

芝田三目ニ番地主平民  
慶應義塾社頭

福澤諭吉

大郡卿西郷從道殿

別紙

本文私塾維持ノ為資本拜借ノ高私共ノ  
身分ニ於テハ巨額ノ様ニ聞之臣國ノ大計ヲ以  
テ論スレバ必スモ巨額ナラザルモ奉存候  
其次才ハ辰ニ當塾ヲ官立ノモノト視候  
二十年ノ間ニ三千ノ生徒ヲ教育スル其官費ハ  
必ス巨萬ノ金額ナラシ然ルニ當塾ハ今日ニ至ル  
マテ公共ノ保護ヲ仰カズ有志者ノ寄附ヲ求メ  
ズレテ此歲月ヲ維持シタルモノナレバ今官私別  
ナク日本全國ヲ一家ノ會計ニシテ考レバ慶應

義塾ハ既ニ乙ニ幾分ノ國費ヲ省キタルモノト  
云フモ或ハ妨ナキ哉ニ奉存候况ヤ此度資本  
本ハ唯拜借ニシテ抵當ヲモ納ルナレバ敢テ  
政府ノ會計ヲ勤カスモノニ非ズト信スル所ニ候  
従前政府ヨリ教育保護ノ為ニトシテ資本拜借  
等被仰付候例ハ無之候得共公大ノ目ヲ以テ  
見ルニ全國ノ人民ニ業ヲ勸ルモ學ヲ勸ルモ正レ  
ク同一主義ニシテ其成路モ亦孰レカ輕重別  
アルコラス然ルニ政府ニハ既ニ勸業勸農勸商ノ  
局ヲ開テ常ニ人民ヲ保護獎勵スルノ事情

ハ詳ニ傳ニ兼仕居候然ハ則テ今農工商ノ事ニ  
比シテ重大ナルモ輕少ナラザル教育ヲ勸ルニ於テ  
若干ノ資本金ヲ御貸渡レ相成候モ事物ノ  
平均ヲ破ル義ニ無之事ト存候  
教育保護ノ爲ニ資本拜借ハ假ニ妨ナキニ  
スルモ此一私塾ニ許シテ他ノ二私塾ニ許サザルノ  
理ナレ之ヲ許サザレバ物論ヲ生シ之ヲ許セバ際限  
アルコトヲズトノ御不都合モ可有之哉ニ存候得  
共此一事ニ就テハ特ニ陳述ス可キ次第アレバ  
少シク高案ヲ煩ハサレテ乞フ抑モ慶應明

河ノ際兵馬騷擾全國ノ機關一時破レ江戸開  
城隨テ舊開成校モ共ニ敗類レテ該校ノ教師  
輩ハ無論府下ノ學士ト稱スル者モ四方ニ散レテ  
行ク所ヲ知ラス大都會中復タ一名ノ學士ニ逢  
ハス亦一所ノ學校ヲ見ズ江戸尚且然リ各地方  
ノ風景推レテ知ル可レ天下武ヲ知テ文ヲ脩ルレ  
暇アラサルナリ舊物既ニ廢レテ新政未ダ行ハ  
レズ大學未ダ立タズ文部未ダ設ケズ恰モ文物  
暗黒ノ其時ニ當リ獨リ數十名ノ學士ヲ集メ  
テ安ニレテ書ヲ讀ミ彈丸雨中呻吟ノ聲ヲ

絶ザリレモハ唯愛應義塾ノミナラシ言ハシク  
自負ニ且リ憚多ク候得共當時日本國中  
文學ノ命脉ヲ一日モ維持シタルモノハ我義塾テ  
リトテ舊社中ノ輩ハ今日ニ至ルマデモ竊ニ得意  
ノ顔アル如クレテ世上或ハ之ヲ許ス者モアリ  
他ノ學塾ニ比レテ少シク區別スルモ妨ナキ我ニ  
奉存候

又舊幕府ノ末年攘夷ノ議論盛ニレテ世ノ學者  
漢ニ入ラザレバ則チ皇ニ歸シ洋學ノ如キハ之ヲ度  
外視スルノミナラス其主義ヲ諒リ其人ヲ蔑視シ

甚レキハ洋學者ニシテ生命ヲ安ニスルノ地ナキニ至  
リレ其時運ニ際シテ當座、如キハ百方敵ヲ引受  
ケ恰モ籠城ノ覺悟ヲ以テ尚竊ニ日新ノ説ヲ唱ヘ  
タルナレモ故スル者アレバ亦應スル者モ少ナカラ  
ズ維新前後諸藩地ヨリ来テ入社スル者次第ニ  
増加シタルソ三百諸侯、藩士新陳交替シテ各  
藩多クハ二三十名少クハ三五名常ニ整ニ寄宿セ  
ザルハテレ且其人物モ平均スレバ奮下ノ者ニ非サ  
ル歟成業退塾シテ行ク所ヲ察スルニ或ハ著  
書出版ヲ業ト為シ或ハ諸學校ノ教員ト為

リ又或ハ都鄙ノ新聞演説ノ社入ルガ如キハ無論  
自今ノ諸省有る處又ハ有名ナル諸會社ノ人ヲ枚  
舉スルニ人品ノ高下ヲ論セズ其人真中ニハ必ス當  
塾ノ舊生徒ヲ見サル所ナキガ如シ既ニ社會ノ表  
面ニ其人ノ在ル有リ多少ニ國ノ用ヲ為シテ世間  
ノ耳目タルモ亦論ヲ俟タズ之ヲ彼ノ勸業等ノ  
事ニ比シテ形容スレバ二十年ノ勸業既ニ其実効  
ノ一斑ヲ示レタルモノト云フモ可ナラン孰是亦他ノ  
學塾ニ比シテ少シク區別スルモ妨ナキ哉奉存  
候政府ニモ其邊御斟酌相成候譯ニ歟

既ニ當塾三等以上生徒ハ兵役ヲ免セラルル御  
指合ヲ蒙リタルトモアリ夫是ノ事情ヲ御考  
案被成下候ハ、依令ヒ今般特典ヲ以テ本文  
ノ願意御申届相成候共他、差御旨ハ無之儀  
ト奉存候ニ付何卒御詮議、上御許容相成  
候様奉願候也